医療最前線
>>>vol.67

川崎医科大学附属病院
皮膚科

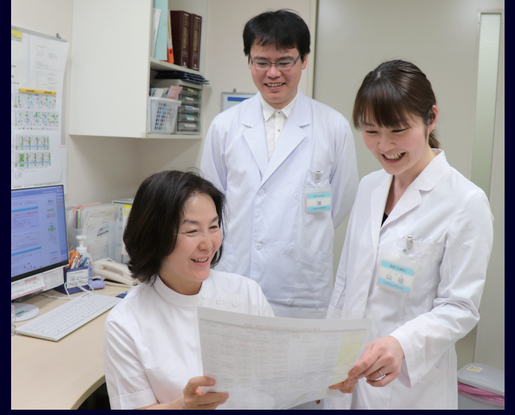
Report!

原因から治療法まで…大切なのはアトピー性皮膚炎を正しく知ること。

皮膚のバリア機能低下がアトピー性皮膚炎の要因。

「アトピー性皮膚炎の病態には『アレルギー性炎症』や『かゆみ』が挙げられますが、その要因のひとつとして近年注目されているのが『皮膚のバリア機能の低下』です。皮膚の表面にある角質のバリア機能が低下すると体の内側から水分が蒸散しやすくなり、同時に外側からの刺激を受けやすい状態になります。そのためアレルギーの原因となる抗原（アレルゲン）も侵入しやすくなり、アレルギー反応として、皮膚炎が起こります」と話すのは青山裕美教授。長年にわたってアトピー性皮膚炎をはじめ自己免疫性水疱症や乾癬（かんせん）、白斑など、皮膚疾患の診療・研究に従事してきた。「皮膚のバリア機能の低下」は皮膚のかゆみを感じさせる作用もあり、患者はつい皮膚をかいてしまう。それによりバリア障害がさらに進行し、炎症が強くなる悪循環を招くとのこと。

「アトピー性皮膚炎の治療は、この『悪循環』を断ち切ることにあります。最近、うまく汗がかけない『基礎発汗障害』の患者さんが増えています。まず皮膚の機能を回復させるためも、発汗機能を高めることが必須。お風呂はシャワーではなく浴槽に浸かる。日頃から適度な運動をする。保湿剤などを使って肌の保水力を高めることも大事です」。

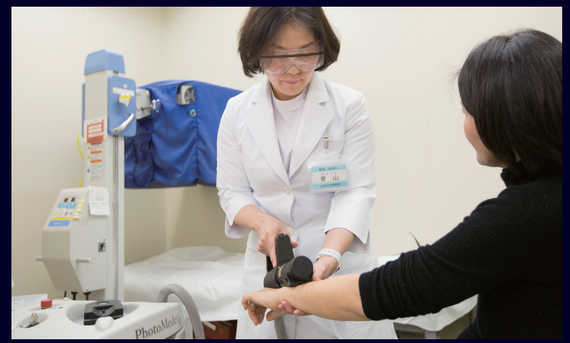


「急に悪くなったときにすぐに診てもらえるクリニックと、じっくり話を聞いて専門的な検査・診療ができる大学病院。それぞれが地域のなかで連携していくことが大切」と青山教授は言う。

「原因は何か？ それぞれの患者さんによって異なる原因を特定し、症状を適切にコントロールしていくことが治療の第一歩」と青山教授は考える。

Dermatology

適量とぬり方を覚えてもらうため、外用薬使用の指導をしている。



当科では皮膚疾患を正しく診断し、適切な方法で治療するよう心がけている。

アトピー性皮膚炎の基本的な考え方	皮膚炎を治すのも大切だが、皮膚炎が生じないように皮膚をすこやかに保つことも大切。そのためには ● 洗いすぎない ● 保湿剤を使う ● 湿疹ができたらしっかり治すことが重要。

1日1万歩を目標に歩いています。土日は岡山後楽園を散策。年間パスポートが役立ってます（笑）。あとは体幹を鍛えるピラティスも続けています。正しい姿勢で患者さんに向き合う。しっかり歩いて健康キープです！

青山裕美 教授
Aoyama Yumi
■ 専門医
日本皮膚科学会皮膚科専門医

じっくり時間をかけて話を聞く。そこから適切な治療法を見い出す。

近年、治療法の新たな選択肢として注目を集めているのが、アトピー性皮膚炎の全身療法（注射剤）として世界で初めて承認された抗体医薬「デュピルマブ」。二〇一八年一月に製造販売承認を受け、同四月より一般向けにも診療が開始され、保険適用の対象にもなっている。

「この抗体医薬（デュピルマブ）を使った治療は、大人の中等度から重度の患者さんが対象です。二週に一回の自己注射で対処できますから、仕事やプライベートへの影響も最小限で済みます。強いかゆみで、眠りが浅くなる、仕事や勉強に集中できないといったＱＯＬ（生活の質）の低下改善にも役立っています」。

最後に、「アトピー性皮膚炎の原因は患者さんによってさまざま。それだけにじっくり話を聞いて正確な診断をすることが大切です。当院では発汗機能などの専門的な検査から新しい治療まで、大学病院ならではの検査治療体制が整っています。治療の適正化に結びつく証拠を集めることが私たちの任務です」と医師としての想いを語る青山教授。研究から診療まで、今後もさまざまな取り組みが注目されている。

お問合せ
川崎医科大学附属病院
倉敷市松島577
086-462-1111
https://h.kawasaki-m.ac.jp/

■2020年4月25日号掲載
本文中の医学情報、写真は掲載当時のものです。